日本保育学会公式シンボルマーク

日本保育学会会報

2014年1月5日　発行
編集・発行　一般社団法人
日本保育学会
編集責任者　中坪史典

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

●第158号●

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B,Rロジェ T-1
Tel 03-3234-1410　Fax 03-3234-1414
http://jsrec.or.jp

◉特集◉ 子どもの豊かな経験を育む児童文化財

絵本、紙芝居、わらべうた、伝承遊び、積み木、さらには新しいメディアも含めて、保育所・幼稚園の実践は、さまざまな児童文化財を介して展開されている。そこで今回は、子どもの経験を育む児童文化財に光を当てた特集を企画した。さあ、みなさん、児童文化財が拓く豊かな保育実践の世界を味わおうではありませんか。

世界とつながる日本の伝承遊び

安藤　正樹

20年来、保育者・教育者養成の各授業で、日本の伝承遊びを学生に教え（伝承し）、卒業後の現場では子どもたちと一緒に遊んで、保育・教育に生かしてもらいたいと思い実践を繰り返してきた。この実践を検証し、さらに研究を深めようと、2008年の日本保育学会第61回大会から、「伝承遊びについての一考察」というテーマで、「独楽回し」「お手玉」「折り紙」「あやとり」「竹馬」を取り上げ、ポスター発表を継続してきた。

これまで発表してきたこれらの伝承遊びの共通点は、どれも『日本固有の独自性を持ちながら、世界の国々や人々とつながることのできる、優れた児童文化財』だということである。

「独楽」と「お手玉」は、約4000年の歴史があり、古代エジプト時代から、様々な種類が世界中の人々に親しまれ、遊ばれてきた伝承遊びであることが分かった。その中でも日本の「独楽」は、江戸時代に隆盛を迎え、独楽の種類と技の種類は、今も日本が世界一である。「お手玉」も、現在のような、布の袋に植物の種を入れて遊ぶ日本独自のお手玉になったのは、やはり江戸時代後期になってからであった。

「あやとり」も日本だけのものと考えやすいが、意外にも世界中で古くから親しまれている伝承遊びである。北極圏、北アメリカ、南アメリカ、アフリカ、オセアニア、東南アジアなど世界各国で様々なあやとりが採集されており、ネイティブ・アメリカン、イヌイット、アボリジニ、マオリなどの先住民族の間では盛んに行われていたようである。特に、パプアニューギニアを中心とする南太平洋オセアニア地域は、あやとりの宝庫といわれ、約2,000種を超えるあやとりが採取されている。あやとりは、呼び方や遊び方、形や種類が違っていても、一本の輪になったひもで遊んだり、楽しんだりすることは世界中同じであることが分かった。

日本の「折り紙」は、奈良時代から日本各地に製法が伝わった「和紙」を、神社仏閣での御幣（ごへい）やしでなどに使用したことが起源とされており、明治になってから現在のような正方形の紙として保育・教育現場で使用されるようになった。日本の折り紙の技術や芸術性は、世界的にも高い評価を受けており、世界約30数ヶ国に愛好団体が組織されているほどで、現在は、「Origami」として世界共通語になっている。

このように日本の伝承遊びは、保育・教育現場で日本の子どもたちの豊かな経験を育む児童文化財の１つであり、これに世界の子どもたちも経験していることを伝えて深めていけば、これからの国際理解や国際交流の場にも生かすことのできる優れた保育・教育教材にすることができると考える。

現在「世界文化遺産」として、各国の風習や民族（民俗）舞踊など、生活の中に根付いた文化やその歴史が貴重だと、世界中から注目を集め始めている。これと同様に「伝承遊び」は、子どもの遊びではあるが、世界中の人々が経験し、認知しており、長い歴史の中で世界の人々の文化として定着してきたと言っても過言ではない。世界の『子ども文化＝児童文化財』は、子どもの豊かな経験を育み、成長を手助けする貴重な財産として、もっと社会に認められ、世界的に大切にされて良い文化の１つだと考える。世界の子どもたちの伝承遊びや児童文化財が、多くの人々から高く評価され、『世界子ども文化遺産』という名前で呼ばれるようになることを強く提案したい。

●*Profile*
安藤　正樹（あんどう　まさき）
尚絅学院大学総合人間科学部子ども学科　准教授
全日本独楽回しの会　会長
1958年鳥取県生まれ。宮城県仙台市の小学校に13年間勤務。
『児童文化論』『保育内容 健康』『体育』『保育実習指導』等を担当。
「日本の文化・伝承遊びの研究・実践」（日本保育学会第65回大会ポスター発表『研究奨励賞』受賞）、「日本の民俗舞踊の教材化」等を研究。

絵本と出会い、世界を拓く

横山　真貴子

絵本のページをめくると、「いま、ここ」を超えた物語の世界が広がる。乳幼児期の絵本の楽しみは、その「物語」の世界を、子どもたちが「ぼく・わたし」の世界として、「いま、ここ」の世界で展開していくことにあるように思う。子どもたちは、絵本という空想の世界を、身体をつかい、保育者や友だちとつながりあいながら、現実世界に再構築していくのである。

研究者として、子どもが絵本と出会う保育の場に足を運んで20数年。本稿では、筆者が目にした子どもの姿をもとに、絵本という児童文化財に子どもが出会い、自らの世界を拡げていく様を綴ってみたい。

1. 絵本と出会う

子どもは、人を介して、絵本と出会う。そもそも保育室に絵本がなければ、子どもは絵本に出会うことはできない。さらに「もの」ではなく、「物語」の世界として絵本と出会うためには、読んでもらう必要がある。文字が読めない子どもが物語を「知る」ためには、読んでもらうことが不可欠である。しかし、それだけではない。

ある保育所の1歳児クラスで『もこ　もこもこ』（谷川俊太郎作・元永定正絵，文研出版）を保育者が数人の子どもたちと読んでいる場面を見た。「ぷうっ」とふくらんだ赤いまるが「ぱちん！」とはじけて、「ふんわ」「ふんわ」と足（？）の生えたさんかくになって空から降りてくる場面がある。保育者は、自身の身体も絵本も、ゆったりと横に揺らしながら、「ふんわ」「ふんわ」と優しくうたった。子どもたちも保育者のうたに身を委ね、「ふんわ」「ふんわ」とゆっくり身体を揺らした。やわらかな時間がおだやかに流れた。『もこ　もこもこ』の世界が、「いま、ここ」にいる子どもたちの「ぼく・わたし」の世界に拡がっていた。

2. 世界を拓く

保育室にある絵本コーナーの絵本のなかで、子どもたちが手に取るのは、どんな絵本だろう。観察したことがある。そうすると6、7割は、保育者がクラスで読んだ絵本であった。子どもたちは、保育者や友だちと共に体験した絵本の世界を、今度は自分で手に取り、体験する。絵本をクラスで読んでもらう経験は「三間（時間・空間・仲間）」を共有する経験でもある。絵本経験を核に子どもたちは世界を拡げ、ごっこ遊びや劇遊びに発展することも多い。ある幼稚園の4歳児クラスでは『てぶくろ』（ウクライナ民話　ラチョフ絵・うちだりさこ訳，福音館書店）を保育者がクラスで読んだ後、「てぶくろ」ごっこが始まった。1人の男児が大型積木で囲いを作りはじめると、「あ、てぶくろ！」と他の子どもたちも「くいしんぼねずみ」や「はやあしうさぎ」になって、「いれてくれ」と積木のてぶくろの中に身を寄せた。動物のお面を作ったり、大きな段ボール箱でてぶくろをつくったり、1人ひとりがいろいろな動物になりながら、『てぶくろ』の世界を楽しんだ。

絵本の世界が子どもの生活のなかに根付くことも多い。まじめでしっかりした子どもが多い幼稚園の5歳児クラスで『いいから　いいから』（長谷川義史，絵本館）が大人気になったことがあった。何があっても「いいから　いいから」、誰に対しても「いいから　いいから」。おおらかで寛容なおじいちゃんの一言が繰り返される絵本を、子どもたちは読みあった。日々の生活のなかでの友だちの失敗もちょっとしたいざこざも「いいから　いいから」と声をあわせて、笑いあった。

文化財は、人とのつながりのなかで伝承される。絵本も人（保育者）を介して子どもたちに手渡される。こうして受け止めた絵本の世界を、子どもたちは「わたしたちの世界」として、日々の生活のなかに再構築していく。新たな文化を拓いていくのである。

●*Profile*
横山　真貴子（よこやま　まきこ）
奈良教育大学教育学部　教授
絵本（本）とのかかわりも含め、文字を獲得し、世界を拡げていく子どもの発達の姿を、子どもが生活する場で捉えることが現在の主な研究テーマ。今年度は、幼稚園4歳児のクラスに1日身を置き、観察させていただいている。

「積み木」引きだされる思い・つながる思い

宮田　まり子

積み木は1840年に世界で最初に幼稚園が開設された頃より世界の多くの幼児教育施設に存在し、多くの子どもが積み木での遊びを体験している。

教育玩具の歴史を究明した是澤博昭氏によれば、「積み木」は「恩物」として輸入された玩具であるという。Fröbelが制作した恩物（Gabe）は、内なる神性の現れである自己活動性、活動衝動を正しく導くという教育的意図がある。その恩物を、日々の保育の中の幼児の思いと行為の先に置いたのは、明治から大正にかけ保育を育んだ中村五六や倉橋惣三等であった。

積み木は、保育者の日々の実践において長きに渡ってその教育的効果が認められた教材の一つであるといえる。今日の設置基準に積み木の記載は見られないものの、1948年に出された「保育要領」では、園に設置すべき遊具として積み木の大きさに対する個数の内訳までもが明記されており、1976年に東京都の第5次幼児教育問題調査委員会が行なった調査では、大型箱積木は80％の幼稚園に、一番設置が少ない小型箱積木でも40％の幼

稚園に設置されており、積み木が一切ないという園はなかったとの報告がなされている。近年では、素材にねらいを持たせた積み木や、基尺と呼ばれる積み木の寸法に操作のし易さや遊びの広がりを意図した積み木が制作され、ワークショップによる紹介が行なわれる等、積み木の普及と需要は高まっている。

筆者は、大学院で学ぶ傍ら、幼稚園や保育所に通わせていただいている。そこでは、保護者に連れられて登園し、園の入り口で靴を脱ぎ、履き替え、手を振って別れ、背を向けて保育室に向かう子どもたちが、自身のために用意された環境のどこかにより所を見つけて、園での生活を認識し、他児と会って少しずつ世界を広げていく姿に出会う。そして筆者はそのより所の一つが積み木であるのを観た。3歳児の積み木場面の始めは、「積む」「崩れて歓声が上がる」等の姿があり、そのうち積み上がった積み木に対し「○○だ」という見立てがなされ、他児の積み上げや崩しに対し「違う」という声が聞かれた。やがて「○○だからね」等のイメージが共有化された後に積み上げられていくようになった。積み木に向けられていた子どもたちのまなざしが、徐々に他児に向けられ、その他児が仲間として意識されていったのである。

積み木は、(1) 積み手の一つの行為によってイメージが具体的に現され (2) ゆえに積み手同士の目的や目標の差異が明確になり (3) 数に限りがあるため、共に使用する遊び仲間を意識せざるをえず (4) ユニット部の上下にはめ込める凹凸があるブロック等と異なり、高く積むためには積み木の面と床面とを常に平行にさせなければならず、砂や雪等に比べて可塑性が低く、積み木の形状自体を変えることができない。そのため、創造に制約を生む一方、制約があるゆえに思考や操作の修正が一層求められるという特性を有した教材である。また大型の物になれば (1) 構造物が他者の眼に触れやすく (2) 操作にあたっては他者と協働せざる得ない場面が発生しやすいことも特徴になる。よって積み木には、行為と結果の即効性からの因果関係への気付きの促進と、他者に働きかける機会の増進を期待することができる。また、特に重要なのは、行為者の目的に応じて役割を変化させることができることである。「積み上げる」だけではなく、おままごとの椅子やテーブルになったり、ステージになったりもする。

これからも積み木の意義が認められ、子どもたちが積み木に出会い、行為を通して自己を知り、他者に気付き、多くの仲間と思いを広げて遊び続けることを願いたい。

●*Profile*
宮田　まり子（みやた　まりこ）
東京大学大学院教育学研究科　博士後期課程1年
人が他(者・物)に気付く過程に関心があります。現在は幼稚園や保育所での参与観察を通して、3歳児積み木場面における協働の過程を研究しています。

わらべうたと子どもの育ち

斉木　美紀子

「また来てね！」1人の男児が部屋を抜け出し、職員室へと引き返した私の後を追いかけ、頬から湯気の出そうなやんちゃ満面の顔で私にくれたこの言葉、この場面がなぜか私の心の中でふとした時にリピートされる。私は保育園で、1つのクラスを年少から年長までの持ち上がりで継続してわらべうたを教えており、子ども達からは“わらべうたの先生”と呼ばれている。この場面は彼らと出会ってちょうど3年が経ち、卒園式を終えて間もない彼らと最後のわらべうたの時間を終え、別れの挨拶を交わし、職員室へ戻った後のことであった。

わらべうたは、基本的には生活の中で子ども達から自然発生的に生まれたうたが、歌い継がれてきたもので、時代、地域性の影響を受けながら変容し伝わってきた、まさに子どもによってつくり出された文化財である。それにも関わらず、保育の中に特別にわらべうたの時間が設けられ、教える先生が来る、その役割を担う私は常にどこかで罪悪感も感じてきた。実際、私が教えているわらべうたは、殆どが大人になってから楽譜集を通して知ったものである。しかし、この特別に設けられたわらべうたの時間を通して、一言では語れない子ども達それぞれの成長を私は肌で感じてきた。特にこの男児は、初めて出会ってから、早くも私の中で気になる存在となった子どもである。我が強く強引で、我れ先に主張し、思い通りにならないとすぐに手が出るため、わらべうたの時間の中でも毎回トラブルが起こる。勿論大人に対しても我が通らないと利かん気を発揮し、非常に手を焼かす。

しかしこの男児は、クラスの子ども達や保育者と様々なぶつかりあいを通し、年長になる頃には、遊びが中断される時間が短くなり、手を出すことも殆ど無くなり、時には自らルールを口にするようにさえなった。我が通らないと、まるで仁王様のような形相で歯を食いしばり、感情を迸らせるのだが、その彼の心と頭の中で必死に自我と外側の目が戦っている様子が見て取れる。そして暫くするとす～っと遊びの輪の中へと戻っていくのである。園の先生のお話から、園の子ども達はわらべうたが大好きであるが、この男児もとりわけ好きであり、自分の我とみんなでわらべうたをしたいという気持ちの葛藤で、最終的にわらべうたの方が勝つのだということであった。

さて、この男児、生み出すのはトラブルだけではない。その我の強さは、時として求心力となる。ある時、何かの拍子から、わらべうたに男児が合いの手を入れてうたったのだが、それが瞬時に他の子ども達に受容、共有さ

れ、それからは全員が合いの手付きで、何とも楽しそうにうたうようになってしまった（この合いの手は、歌詞から連想された音の表現と思われる）。そのうたはまるでこのクラス共有の“彼らのうた”になったかのようで、言い換えれば、与えられたわらべうたは、ただ受容されたに留まらず、新たにつくり変えられたようにも感じた出来事であった。

わらべうたのもつ様々な特色は、人との関係性を深める力がある。この男児の3年間の歩みは、勿論保育全体の様々な場を通して育まれてきたものであるが、わらべうたもその育ちに少なからず寄与していると感じている。

わらべうたで目一杯遊ぶその蓄積、そこで起こる様々な出来事と関わり、そしてその場を共有することを通して、彼らがもつ自ら育つ力に多様なエネルギーが与えられていくのではないだろうか。

「また来てね」その言葉に様々な思いを重ね、私はまた、新たに出会った子ども達とわらべうたの時間を共にしている。

●*Profile*
斉木　美紀子（さいき　みきこ）
田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科　講師
子どもが自分を取り巻く世界とどのように相互作用しながら育っていくのかについて関心を持ち、わらべうたを中心に活動しています。

人とかかわる力を育むわらべ歌遊び

泉澤　文子

近年の幼児たちには、10年前の幼児たちと比べてみると、友達のしている遊びに加わりたくても、「入れて」という言葉を言うことに躊躇してしまう幼児が多いと感じる。特に人とのかかわりの中で、自分の思ったことをどのように表現したらよいのか分からず、友達とトラブルになってしまったり、友達と手をつなぐことに抵抗を感じてなかなか手をつなげなかったりする幼児が多い。また、幼児の姿を見ていると“結果がすぐに出る・勝負がはっきりわかることに楽しみを感じ、スピード感を求める”という傾向がある。

私の園では、預かり保育を含み午前7時30分から午後6時30分までが保育時間となっており、在籍園児のうち半数の家庭が預かり保育を利用している。本園の幼児たちは、入園前に、友達と集団で遊んだ経験が少ない幼児が多く、「一人遊びをする」「母親と2人で遊ぶ」「いつも決まった友達と2～3人で遊ぶ」「保育所や託児所・保育ルーム等の設定された集団の中で保育士を媒介にして遊ぶ」という経験を経て、入園してきている。自ら遊びたい友達を見つけ、「入れて」ということに慣れていない。そこで、わらべ歌遊び（「かごめかごめ」「はないちもんめ」等）を保育に取り入れていくことにより、人とかかわることができるようになるのではないかと実践してきた。保育の中にわらべ歌遊びを多く取り入れた結果、学級の誰とでも手をつなぐことができるようになり、呼吸を合わせて遊んだり生活したりできるようになってきた。さらに、自分の思いを伝えるだけでなく、相手の思いを感じ取れるようになり、友達と気持ちを合わせることができるようになった。そして、わらべ歌遊びが幼児の生活の中に根付いていくことにより、いつの間にか学級の幼児同士の気持ちが一つに繋がっていき、互いを思い合い、認め合う友達関係が築かれてきた。

近年の幼児の遊びは個人中心のものが増え、集団遊びが消滅してきている。園全体で幼児の豊かな文化を築いていけるような保育内容を考えていく必要があると感じている。

私が教員になったころは、「かごめかごめ」「はないちもんめ」「あぶくたった」「おおなみこなみ」「ゆうびんやさん」等、いろいろなわらべ歌遊びをごく自然に行っていたが、ここ何年か、わらべ歌遊びを保育に取り入れている教員が少ないと感じる。本園の職員にわらべ歌遊びについて聞くと、40歳を境にそれ以下の職員は子ども時代にわらべ歌遊びをした記憶がない、わらべ歌遊びを知らないというという声が返ってきた。わらべ歌遊びは日本の子どもたちの伝承遊びであったものが、子どもたちの遊びとして伝承されなくなってしまっている。人とかかわることが苦手な幼児が増えたこととわらべ歌遊びが子どもたちの遊びの中で伝承されなくなったことと関係しているように思う。

人とのかかわり方を学んでいく幼児期において、保育の中にわらべ歌遊びを取り入れていくことは、人と呼吸を合わせる心地良さ・共に手を取り合って歌を歌い合いながら遊ぶ楽しさ・ルールを守って遊ぶ楽しさ等、人とのかかわり方や社会性を身につけていくことができ、言葉では教えられない様々な感情を全ての幼児に伝えていくことができる、現代の子どもたちに必要な活動だと思う。これからも、わらべ歌遊びが幼児の遊びから消えないように、幼児教育の中で引き継がれ、生かされていくよう、子どもたちや教職員に伝えていきたい。

●*Profile*
泉澤　文子（いずみざわ　ふみこ）
千葉県浦安市立若草幼稚園　園長
保育の中でわらべ歌遊びを取り入れていくうちに、わらべ歌遊びのおもしろさや日本古来の文化等、奥の深さを実感した。いろいろなわらべ歌遊びに関心をもっている。

「新しいメディア」としてのスマホ・タブレット—どう向き合うか？

阿部　学

「新しいメディア」とは、捉え難い言葉である。たとえば、任天堂のファミリーコンピュータが発売されたのは1983年。子どもたちの生活を一変させた「新しいメディア」が登場したのも、今は昔である。時は流れ、現在の「新しいメディア」の主役は、スマートフォンやタブレットPCということになろう。子どもが親のスマホを借りて指を動かしているといった光景が、あちらこちらで見られるようになってきた。

スマホ・タブレットの特徴のひとつは、世界規模で流通する多種多様なアプリを自由に追加していけることである。最近では、乳幼児向けのアプリにも様々なものが登場している。一体、子どもたちはどのようなアプリを、どのようにして使っているのだろうか。

ここでは、株式会社スマートエデュケーションが制作した「おやこでリズムえほん」という乳幼児向けアプリを例としたい。童謡にあわせて、楽器のイラストをタップして遊ぶというアプリである。

ともすれば、こうしたアプリは、乳幼児をひとりで遊ばせておくためのアプリではないかと思われるかもしれないが、そうならないための工夫も試みられている。たとえば、アプリを起動すると「お子さんを抱っこして遊んでください」というメッセージが表示される。できるだけ、親子のコミュニケーションのためにアプリを使ってほしいという制作者からのメッセージである。また、続けて「上の2つの楽器は、お母さん、お父さん用。下の3つの楽器は、お子さん用です」とメッセージが表示されるように、アプリ自体が親子で遊びやすいものとなるよう意図されている。

私自身は、こうした制作の背景から2つのことを考える。ひとつは「新しいメディア」の良し悪しは、その使い方によって決まるということである。コミュニケーションの一部分としてアプリがうまくなじむのであれば、ともにアプリで遊ぶ時間は、親子にとって大切なものになるだろう。もうひとつは、ある道具を介してコミュニケーションを誘発するという試みには、過去の保育研究の成果や、保育者のもつ経験知が活かされうるのではないかということである。そうすることで、多くの親子が「知育アプリ」をよりよいかたちで受け取れるようになるはずである。これは保育界の研究成果を社会に還元するよい機会とも考えられないだろうか。

他方、保育実践の中でスマホ・タブレットはどう活用しうるだろうか。千葉県のある幼稚園では、音楽を流す際に使っていたCDをiPadに切り替えた。iPadではCD何枚分ものデータを1台で管理できるため、即時的な再生が可能になったという。また、ふとした時に保育者がシャッフル再生で音楽を流すと、思いもよらなかった歌に子どもたちが惹きつけられたということがあったという。子どもたちにとっては、歌との偶然で幸せな出会いであり、保育者らにとっては、子どもや教材についての新たな認識の機会であったといえよう。

この話は些細なものであるが、目的の情報にすぐにアクセスできる即時性や、多様な情報の中で意図しない情報に出会う偶然性といった、スマホ・タブレットでの情報アクセスの特徴を描きうるものである。仮にスマホ・タブレットを児童文化財として捉えるならば、他の児童文化財との違いとして、物体そのものではなく、物体からの情報アクセスの仕方に留意する必要があるだろう。

※株式会社スマートエデュケーションのアプリに関しては、同社の日下部祐介氏、井上篤氏にお話を伺った。

●*Profile*
阿部　学（あべ　まなぶ）
NPO法人企業教育研究会　理事・主任研究員、千葉大学教育学部　非常勤講師
最近の関心は、ごっこ遊びを「現実—虚構」の二重構造ではなく、さらに複雑な多層的構造として捉えることです。バフチンのポリフォニー論やパーソナルネットワークの構造的空隙論などとの接点を探っています。

おしらせ

第67回大会開催

・日　付：2014年5月17日（土）9：30～
　　5月18日（日）9：30～
・会　場：大阪総合保育大学
　　大阪城南女子短期大学
・開催地区：近畿地区ブロック
・大会テーマ：ヒトから人へ、人からヒトへ

第67回大会ウェブページ
http://jsrec.or.jp/hoiku67/

＊大会予約参加の申込期限＊

発表はせずに大会へ参加のみされる方の事前申し込み期限は1月20日（月）までとなっております。奮ってご参加ください。